

美術に即した文化的・国家的自己同一性の追求・形成の研究—全アジアから全世界へ

小川 裕充

(東京大学・東洋文化研究所・教授)

【研究の概要等】

本研究の目的は、第一に、近代における文化的・国家的自己同一性の追求・形成が、アジアにおいて如何に行われてきたのかについて、伝統的な造形藝術の枠組に留意しつつ、美術という最も包括的かつ視覚的・明示的な分野に即して、個別・具体的な調査・研究を進めることにある。第二に、近代列強としてほぼ全世界を植民地化したヨーロッパ・アメリカにおいて、他地域世界の美術が、逆に、先進近代国家としての国家的・文化的自己同一性の追求・形成に如何に関わってきたのかについて、特にアジア美術の収集状況を中心に調査・研究を進めることにある。第三に、日本とオーストラリアという特異かつ対照的な両国を指標として、アジア美術に即した自己同一性の追求・形成を多面的・立体的に把握することにある。

研究計画は、上記の目的を達成するため、絵画・彫刻・建築の各班に分かれて、国内外調査を実施することを前提とし、その成果を踏まえて個別・具体的な考察を行うことを目指す。

学術研究としての特徴は、あくまで具体的な造形性の分析に基づきつつ、伝統的な造形藝術との連続性にも留意し、文化的・国家的自己同一性の実態を明らかにすることにある。

【当該研究から期待される成果】

自己同一性は、しばしば伝統との断絶のもとに語られる。所謂伝統の創造、ないし捏造の文脈で論じられることもある。両論の陥穽は、近代的なものである自己同一性の概念が、造形藝術の具体的な作品においては、伝統との連続性を保ちつつ、追求・形成される場合があることについての認識を欠く点にある。伝統との連続も断絶もその創造も捏造も、具体的造形性を踏まえて包括的に考察し、近代の世界帝国の表象から現代の世界都市のそれへの変容を遂げつつある、美術に即した文化的・国家的自己同一性の内実を究明することが、本研究から期待される成果である。

【当該研究課題と関連の深い論文・著書】

- ・「五代・北宋の絵画—伝統中国の歴史的・文化的アイデンティティの淵源」
『国華』東京：国華社、1329号、2006年7月、23—32頁。
- ・「五代・北宋絵画的透視遠近法—中国伝統絵画的規範」
『開創典範：北宋的藝術与文化研討会 研討会論文（初稿）』
台北：国立故宮博物院、2007年2月、43—70頁。

【研究期間】 平成19年度—23年度

【研究経費】 29,700,000 円
(19年度直接経費)

【ホームページアドレス】

<http://cpdb.ioc.u-tokyo.ac.jp/>